

## 基礎学力評価のための国語、数学、 英語試験問題の開発研究

研究開発部試験臨床研究部門  
(現職 東京大学大学院教育学研究科)

研究開発部適性試験研究部門

研究開発部試験臨床研究部門

研究開発部試験臨床研究部門  
(現職 早稲田大学人間科学部)

東北大学大学院教育学研究科

石井秀宗

椎名久美子

柳井晴夫

岩坪秀一

荒井克弘

大学教育に必要な基礎学力を診断・評価する試験問題の開発研究として、第一期（平成13年4月～平成15年3月）総合問題調査研究委員会が作成した国語と数学の「総合基礎」試験試作問題（大学入試センター、2003）を用いて、高校生を対象とした調査研究を以前に行った。そこでは、国語については目標としていた得点率を実現していたが、数学については目標よりも低い得点率であり、問題内容の改善が求められること、また、国語と数学を同一時間内に実施する場合は、受験者は数学の解答により力を注ぎ、国語の成績が低下する可能性があることをなどが明らかにされた。

これらの問題点等をもとに、本研究では、平均得点率7割、最頻値8割を目標とし、第二期総合問題調査研究委員会（平成15年4月～平成16年3月）

によって、改めて開発された国語、数学、及び新規に作成された英語の試験問題を用いて、教科ごとに試験時間を区切って、大学新入生を対象に調査研究を行った。分析結果は以下のとおりである。

まず国語に関しては、目標としていた得点率を実現する50項目からなる試験問題を作成することができた。また、それよりもやや難易度の高い平均得点率6割、最頻値7割程度の50設問からなる試験問題、および、30項目からなるそれぞれの試験問題の短縮版も作成され、それらの信頼性、内容的等価性が確認された。さらに、長文読解問題を挿入し得ることも確認された。ただし、設問数が同じ二つの冊子間に共通の設問が含まれていなかったため、このままでは、それぞれの冊子に解答する受験者の得点を比較することには困

難が予想された。

数学については、難易度は異なるが内容的に等価である二つの試験問題が作成されたと言えるものの、その難易度は目標を大きく上回り平均得点率は4割前後という低い値であった。しかし、得点分布は低得点から高得点まで広く分布していた。大学教育に必要な数学の基礎的能力は学部によっても異なると考えられることから、難易度がある程度異なる複数の試験問題を開発し、数学的能力の必要性に応じた適用を検討する必要性が示唆された。また、解答形式として、解答欄の各マスに対応する数字を塗りつぶす形式と多肢選択形式の混在は、試験問題の信頼性を低下させる可能性が考えられた。

英語については、平均得点率が目標よりもやや低い平均6割、または、約

5割という二つの試験問題が作成され、それらが難易度は異なるが内容的には等価であることが確認された。試験問題の信頼性が高度に高かったことから、信頼性を多少抑えることにはなるが易しい項目を挿入するなどし、目標とする難易度を達成する試験問題を作成することが検討された。また、両冊子間には共通項目が半数以上含まれており、複数の試験問題を提供するという観点からは共通項目の削減を検討する必要性が示唆された。

### 【文献】

大学入試センター（2003）『総合問題調査研究委員会調査研究報告書—国語と数字の基礎学力評価の試み—』報告書

